

氏 名 ^{はやし} 林 ^{かず} 一 ^ま 馬
 学位(専攻分野) 博 士 (工 学)
 学 位 記 番 号 論 工 博 第 3454 号
 学位授与の日付 平 成 11 年 7 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 伊勢神宮及び大嘗宮に関する建築史的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 高 橋 康 夫 教 授 岡 崎 甚 幸 教 授 外 山 義

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、伊勢神宮および大嘗宮なる建築が歴史的にいかなる存在であったか、その建築的な実態とともにその造形的意味や存立の意義について、実証的かつ総合的に考究しようとする建築史的研究である。研究の目的と方法を述べた序章に続き、本論は、第Ⅰ部伊勢神宮論の基礎考証、第Ⅱ部伊勢神宮の建築史的考察、第Ⅲ部大嘗宮の建築史的考察、の3部から構成される。

第Ⅰ部は、第Ⅱ部以下の基盤整備を企図するもので、古事記や日本書記、神宮側の最古の記録である両宮の儀式帳という根本史料において、神宮の起源などがどのように説かれていたか、これを徹底した文献批判を通して再考することを試みている。第1章ではこれの必要性を詳説し、第2・3・4章では神宮の起源伝承を正しく読解することを目指した。その結果、古事記の天孫降臨神話は同時に伊勢神宮の起源譚であったこと、しかもその内容はご神体の由来や祭儀の方式、内・外両宮からなる組織構成などに言及した、その神話祭式的な規範を示すものであったこと、宮廷かその近傍でなされていた皇祖神祭祀を伊勢へ移したこと(神宮の創立)、この神宮の原初的な社殿は斎宮と呼ばれる仮設的な神殿だった可能性が高いことなどを明らかにした。また、天皇家と神宮を結ぶ絆であった斎王を取り上げ、記紀中にみえる初期の斎王は神宮の創立以前に宮廷の近傍において皇祖神祭祀に仕えた皇女達であり、初代の伊勢斎王は天武天皇代の大来皇女だったことなどを考証した(第5章)。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部の考証結果を踏まえて、伊勢神宮についての建築史的な考察を行った。第1章は、伊勢神宮の成立史に関して従来の諸説に対し、神宮創立の端緒は壬申の乱にあり、内宮の社殿確立は持統天皇6年(692)で、外宮の創建は文武天皇2年(698)というきわめて新しい時期であったとする独自の新見解を提示するとともに、それは律令国家形成時における一連の国家的事業の一環としての、神祇政策の具現だったことを明らかにした。第2章では、神社建築としての伊勢神宮について種々の角度から考察を試みた。まず、上代における神社一般の創立、神社神殿の成立とその契機、建築史的な範疇としての神社建築の様式史的展開について反省を加え、これにもとづいて神社建築史上における神宮建築の位置づけを再考した。続いて、神宮の正殿を中心にその社殿の造形要素(棟持柱、板壁、回縁と階段、居玉、心御柱など)とその意味について、主として現象論的な立場から考察を展開した。さらに神宮の数多い祭儀の中から日常の祭儀の核心をなす毎日の御饗進とその舞台となる外宮の御撰殿、そして神宮最大の祭儀たる式年遷宮の二つを代表格として取り上げ、神宮の建築を祭儀との関係で考察した。最後に、一面で伊勢神宮の対極をなす出雲大社と対比して論考した。その結果、伊勢神宮―天皇宮―出雲大社という3者は記紀神話の世界構造に対応した地上的な宇宙軸をなすもので、この3者にはそういう神話祭式的な観想が裏打ちされていたことを推考した。

第Ⅲ部では、大嘗宮について建築史的な考察を行った。第1章では、大嘗宮の中心的な殿舎である正殿を取り上げ、初めて通史的な全容の解明を目指した。同時に、当初は土間形式であったそれが高床化する時期とその理由について、新見解を提示した。第2章では、平城宮における近年の発掘成果をも踏まえながら、大嘗宮全体の配置構成について再考し、あわせてその変遷過程を究明した。これにもとづき、そこでの祭儀の内容や舗設のあり方に立ち入って、それらの原義がどのように変容し崩壊したか、逆に大嘗宮なる祭儀場が設立された当初の意味とその段階でのいわば原初的な性格とはどのようなもの

のであったか、について考察を試みた。

論文審査の結果の要旨

伊勢神宮と大嘗宮は、日本古代建築史上、重要な位置を占めている。本論文は、古事記や日本書記、また神宮側の最古の記録である儀式帳という根本史料において、神宮の起源などがどのように説かれていたかを徹底した文献批判を通して再考したうえで、伊勢神宮と大嘗宮の建築史的考察を行った結果をまとめたものであり、主な成果は次のとおりである。

1. 古事記の天孫降臨神話は同時に伊勢神宮の起源譚であったこと、宮廷かその近傍でなされていた皇祖神祭祀を伊勢へ移したこと（神宮の創立）、神宮の原初的な社殿は斎宮と呼ばれる仮設的な神殿だった可能性が高いことなどを明らかにした。

2. 伊勢神宮論の基礎的考証をふまえて、伊勢神宮創立の端緒が壬申の乱にあり、内宮の社殿確立は持統天皇6年（692）、外宮の創建は文武天皇2年（698）とする新見解を提示し、それが律令国家形成時における神祇政策の具現であったことを論証した。

3. 大嘗宮の中心的な殿舎である正殿の通史的な全容を初めて明らかにし、当初は土間形式であった正殿が高床化する時期とその理由についても新見解を提示した。さらに大嘗宮全体の配置構成と変遷過程を実証し、大嘗宮が設立された当初の意味と性格、祭儀や舗設の変容について解明した。

以上要するに、本論文は、伊勢神宮と大嘗宮という建築が歴史的にいかなる存在であったか、その建築的な実態とともに造形的意味や存立の意義について、実証的かつ総合的に検討し、多くの知見を得たものであり、その成果は学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は、博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成11年6月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。